

◆巻頭言

・ふりむく思い出の会報「潭潭」…… p2

【平成25年度版～令和3年度版の記事タイトルを載せました。詳しくはホームページで】

・秋田県聴覚障害児・者日常生活支援事業 p11

【R4年10月実施。全国難聴児を持つ親の会「ZSZ べる」No.185<5.2.20刊>に掲載されました。】



令和4年度版 (2023年3月28日)

巻頭言

リ・スタート（再出発）

あきこまを支援する会 高橋 恒治

秋田市内で音楽CDが手に入る大型の店が1軒消えました。音楽は円盤のレコード、カセットテープ、CDとカタチは変わったものの、手元に置いて好きな時に再生装置で聴くスタイルが当たり前でした。好きな楽曲を集めるのが楽しみでもありました。それが聴きたい音楽はパソコン、スマホでダウンロードしてその場で聴く、そういう時代になりました。音楽への嗜好の移り変わりがCDを身近に手に入らないものにしてしまったのです。

ネット時代。私たちにとっての文献や指導のノウハウも、人から、先輩から学ばなくてもよい、遠方に出向いてまでも課題を解決しなくてもよい時代です。ネットで簡単にそれらしきものが得られます。組織して集う必要もありません。身近ではPTA、組合（労働団体）、老人クラブなどでも人とのつながりを求めなくてもよいとする風潮にあります。情報はネットで、自分の好みに合ったものを都合のよい時間に学べるのです。何より人間関係で苦労することがない点、ストレスの心配もありません。

さて、17年前、聴言OB会を引き継ぎ、あきこまを支援する会として定期的に集いを開いて来ました。その内容を会報「潭潭」として発行し続けてきました。OB会の取り組みと異なる点がいくつか挙げられます。対象を担当者だけでなく、保護者がかかえる課題解決に少しでも力になればというのが一つです。今思うと、親の会の研修会のような性格を目指していたのかもしれませんが。二つ目は聴言に限らず当時増えつつあった、いわゆる発達障害の子どものための「まなびの教室」（代表呼称）も対象として前面に出したことです。三つ目は、定期に集う回数を増やすこと、それも秋田市だけでなく県北、県南にも同様の趣旨の集いを開くことでした。

奇数月開催の年6回の集いを介して、新しい情報やメッセージが寄せられ、会報「潭潭」は発行できました。会報はこの教育の流れを知ることのできる貴重な財産です。集いの参加者の減少により会報「潭潭」の発行を維持できなくなり、この平成4年度版をもって休止することにしました。今、レコード、カセットテープ、CDの価値が見直され、注目されているように、リ・スタートした時にアーカイブズ会報「潭潭」が活用されるのを楽しみに、そのことを願いながら。

ふりむく思い出の会報・潭潭

★ 会報「潭潭」創刊〈平成8年6月発刊〉からこれまで〈平成23年3月発刊（22年度版）〉

上記会報「潭潭」発刊にあたってのごあいさつを再掲します

ごあいさつ

ときめきをあなたに

OB会会長 高橋恒治

会報「潭潭」（創刊からこれまで）をお届けします。

今年、秋田県聴覚・言語教育研究会は発足40周年の記念すべき年を迎えています。この節目にあたり、OB会から指導教室の皆様これまでの会報を一冊にしプレゼントすることにしました。

この一冊から、

- ・ OB会の歩みを知っていただきたい
- ・ 各ページから聴言研の先輩、この教育にかかわりある方々の熱い思いを感じてほしい

との願いがあります。

OB会は発足して17年目になります。その間いくつかの課題が出てきていました。会を支えるメンバーの交代と減少（言い換えればOB会の少子・高齢化）、現状にマッチした運営の難しさ等々です。OB会の意義の確認については発足20年の節目に向かって行くこれからも話題になることでしょう。

継続か、ピリオドを打つか。これもその一つです。このことの判断基準はたった一つ、「聴覚障害」、通級指導の対象となっている「言語障害」「発達障害」に）〈ときめき〉を感じるかどうかにあります。

今回のこの一冊が〈ときめき〉の一助にできれば幸いです。もちろん現在指導教室を担当されている方々に一石を投じることになればなお幸いです。

「潭潭」をまとめるに当たり、発足当時の「潭潭」を寄せてくださいました方々に厚く御礼申し上げます。また、表紙の題字「潭潭」は辻久視さんが書かれたものを、イラストは、「潭潭」の名付け親でもある遠藤昌夫さんの最新作を使わせていただきました。重ねて感謝申し上げ、ごあいさつといたします。

平成24年8月

★ 平成 25 年度版（2013. 24 年 12 月～26 年 2 月） 25 年 1 月 O B 会ホームページ「あきこまの
たまり場」を創設。 13 本のメッセージを掲載した。

- 1 三つの「つ」 ……つどい、つたえる、つながる
 - ➡ 今年の世相を表す漢字が「金」と発表された。聴言研 O B 会を少しでも「金」に近づけたい。「集い、伝える、繋がる」の三つの「つ」を大事にしたい。
- 2 障害児教育との出会い (1) (2) (3)
 - ➡ (1) 特殊学級を担任していたときに内地留学の機会があった。初めて盲聾学校、養護学校の子どもたちに出会い、特に自閉症に大きな衝撃を受けた。
 - ➡ (2) 内地留学の翌年、養護学校教員免許取得のために大学の通信教育を受講した。養護学校に勤務したのはその 5 年後で、勤務するなかで学習障害児の話を知った。
 - ➡ (3) 国立特総研研修、日本 LD 学会入会を経て、秋田 LD・ADHD 懇話会を開催し全国の著名な専門家を講師に呼ぶことを続けている。
- 3 聴言の聴を思う
 - ➡ 薬や手術で治すことができない、援助ができない医療の限界に対して、最後で最大の援助が「聴く」という援助だというお医者さんから学んだ。
- 4 難聴学級担任の経験から
 - ➡ 難聴学級を 16 年間勤めた。難聴の程度の重い子どもに関わった経験から指導上で大切だと思うことを伝えたい。
- 5 新しく通級指導教室を担当される皆様へ
 - ➡ 最近是指導法や指導技術などの本がたくさん出版されている。ネットでもたくさん調べられる。しかし、知識やテクニック、型どおりのマニュアルだけにとらわれず、目の前にいる子どもたちへ向かう心構えを大事にしたい。
- 6 小学校、中学校への設置、その意義
 - ➡ 小・中学校に設置している特殊学級や教室の意義は、障害のある子どもたちのためのみにあるのではなく、設置校に在籍する子どもたちのことばの力、聴く力、学ぶ姿勢がよくなることのためにもある。
- 7 傾聴とは異なる挑戦
 - ➡ 民俗学を教える大学教員から老人介護の現場に転職したユニークな経験の持ち主が提唱する「介護民俗学」。傾聴とは違う聞き書きの意義を強調する。将来「聴言民俗学」と表現されるときが来るかもしれない。
- 8 残念に思うこと
 - ➡ O B 会の研修会に含まれる懇親会に意義があった。さまざまな企画が消えて行った。何よりも母体をなす O B 会員が年々減少していくことに淋しさを強くしている。
- 9 学校を巡回して思うこと
 - ➡ 授業には教師の人間性や人格などが全て現れる。全校授業研究会で、子供の至らぬ所作に参観者全職員の笑いが広がる。「子供は教師の背を見て育つ」と言われる。おそらく、いじめの芽はそういう所から生まれてくるのであろう。

10 要約筆記とのかかわり

- ➡ 趣味のアマチュア無線からパソコン通信に関心が変わった。コミュニケーションの手段にも新しい流れが出てきている。聴覚障害の人たちとも知り合いになり要約筆記へとつながっている。

11 継続は力、さらに続けて宝なり

- ➡ 2013 年末に選ばれた漢字が「輪」。輪のためには「話」と「和」も必要である。「潭潭」がこれまで続けて来られたのは「話」と「和」でもってしっかりした「輪」をつくることを目指して来られたからである。宝になるまで続けましょう。

■関連情報のページ 知っていますか？秋田県難聴者・中途失聴者協会

■事業と写真（スナップ）

■あとがき

- ★ **平成 26 年度版**（2014. 26 年 4 月～27 年 3 月） 25 年度版と同じく OB 会ホームページ「あきこまのたまり場」に掲載したものをまとめて会報「潭潭」とした。

☆ メッセージ 1 えっ！「ひらがな」で話す？

- ➡ 業界、専門用語には気を付けよう。話がうまい人は「聞き手は言葉をひらがなで受け取っている。そして、ひらがなを漢字に再変換している」ことを理解しているから、その話が聞きやすいのである。

2 情報保障を思う

- ➡ 秋田県難聴者・中途失聴者協会 10 周年記念式典に参加し、手話、ノートテイクの広がりを知った。さらにパソコン要約筆記などは「聴覚障害者のためだけでなく、いわゆる健聴者にもメリットがある」ことも学んだ。

3 ♪そして思い出

- ➡ 世界で初めて手話で歌うための曲が作られた。人と人とのかかわりが詞に込められている。「誰か・めぐり逢う・ふるさと・思い出・山・海・祭」「あなた・みつめあう・初恋・おいしいコーヒー・デート・失恋」「二人・よりそう・ハネムーン・未来・くちづけ・夢・君」

4 教育は所詮

- ➡ 中 1 少年の死体が河川敷で発見された。この事件を未然に防ぐ手立てを考えるとしたら、その糸口は教育現場にある。問題解決のために「手引き」を見る。そうではなく、その前にどうして目の前にいる「親」と「子」から直接指導に結びつく「情報」を得ようとは考えないのだろう。

5 共生社会の担い手に期待

- ➡ 小・中学校には高度の難聴児が在籍し学校生活を送っている。

学校では難聴理解授業が行われ、難聴児への理解や対応の仕方まで学んでいる。将来の共生社会の担い手として大いに期待したい。

☆ Q&A 気になる鉛筆の持ち方

☆ 関連情報のページ 25年度版「秋田のきこえとことば」から見えてきたもの
秋田県の難聴学級、通級指導教室設置状況（26年度）
「秋田のきこえとことば」（H16年度～H25年度）から
書籍紹介① 聴覚障害児の理解のために 第29集
〃 ② 難聴中学生の支援
OB会、及び現職担当者を支援する会の在り方に関する意向調査結果

☆ 編集子から ≪ むのたけじ著 「99歳一日一言」 ≫
≪ 26年度の主な動き ≫

★ 平成27年度版（2015. 28年2月20日発行） 巻頭言を書き、資料を多く載せるようにした。

巻頭言 衣替え

➡ 4月から養護学校、盲学校、聾学校の名称が変わる。さらに3年前に成立していた障害者差別解消法がこの4月に実施される。

Challenge(挑戦)には Change(変化)が含まれている。衣替えは意識だけでなく行動が求められている。

OB会 27年度の事業 語る会と懇親会

- ・ 思いを語る会と懇親会が一泊二日の日程で開催された（27年11月21・22日）。
- ・ 「あきこまの集い」（試行）が遊学舎で開催された。

会員の声 ➡ 「OB会結成をふり返って」のほか、過年度発行の「潭潭」に投稿されたものを掲載。

- ・ 事務局ができたことに感謝して
- ・ 「ことばの教室」黎明期のお話 一運命的な出会い
- ・ 回想 第39回秋田県聴覚・言語障害教育研究大会に参加して
- ・ 開級てんやわんや
- ・ OB会員として
- ・ 未知との遭遇の思い出

「きこえの教室」に寄せて

➡ 秋田市に昭和57年2校目として開設された教室に関わり、悪戦苦闘した思い出

【参考資料】

- ➡ 秋田の聴覚、言語、及び関係団体の流れ
- ➡ 話題づくりのために 潭潭<創刊からこれまで>から拾う

- ・秋田県言語障害児を持つ親の会結成（昭和 40 年 10 月 30 日）
- ・ことばの教室の誕生（昭和 41 年 4 月 旭南小学校）
- ・言障協（秋田県言語障害児教育推進協議会）の発足（昭和 43 年 11 月）
- ・秋田県言語障害児教育研究会の発足（昭和 45 年 11 月 30 日）
- ・きこえの教室の誕生（昭和 51 年 4 月）
- ・養護学校教育義務化（昭和 54 年）
- ・秋田県特殊教育センター設置（昭和 56 年。翌年から特殊教育地域センター設置）
- ・幼児・養護教育課（秋田県教育庁）発課
- ・通級による指導の場の制度化（平成 5 年。呼称「通級指導教室」）
- ・OB 会の発足（平成 8 年）
- ・特別支援教育制度スタート（平成 19 年）
- ➡ 障害児教育（特殊教育） 三つの山（トピック）
- ➡ 我が国の特別支援教育の動向
- ➡ 世界標準…1993 年の国連決議こそ特殊教育の世界標準ではないか（柘植雅義）
- ➡ あらためてインクルージョンとは
- ➡ 新聞報道【インクルーシブ教育】【発達障害】【難聴・手話】
- ➡ 障害福祉をめぐる法体系の動向

★ 平成 28 年度版（2016. 29 年 4 月 20 日発行）

28 年度版発刊にあたって

- ➡ 聴言研 OB 会の活動を休止して 1 年。「あきこまの集い」を 2 カ月に 1 回開催してきた。現在があるのは初めて開級、開教室の時から OB 会に至るまで努力された諸先輩のお力である。

手話ソング「そして想い出」

- ➡ 日本で初めての手話ソング（作詩：丸山浩路・永六輔 作曲：中村八大 歌：坂本九）をイラストで紹介した。

永六輔さんのことば“ 障害者予備軍 ”

- ➡ 永六輔さんが亡くなって 4 カ月（7/7 逝去）。誰もが障害者になる時代。その背景にあるものを「あきこまの集い」に参加された人や近著から紹介

広がれ、UD トークの輪

- ➡ UD トーク学習会が開催され、基本的な使い方を学んだ。聴覚に問題のある人（受け手）だけでなく、送り手の話し方も大切である。どちらにも有益な支援機器であることに気づかされた。

条例制定おめでとう！ 更なる環境充実のためには

- ➡ 3 月の県議会で秋田県手話言語条例が可決され、29 年 4 月 1 日から施行されることになった。

★ 平成29年度版 (2017. 30年4月20日)

巻頭言 アウトプット

- ➡ 栗田養護学校高等部第1期卒業生10人の保護者が結成した「10人会」。結成した代表の生き方は与えられるのを待つ(インプット)のではなく、アウトプットを大事にした活動の積み重ねにある。

手話… 著書:「学ぶ」前に「訪ねよう」

- ➡ 著者は文化人類学者。学問の理論から入るのではなく、まずはその集まりの場に出かけ、生の現象に出会うことからスタートするフィールドワークの手法を手話、ろう者の世界でも生かそう。

老人クラブ考

- ➡ 「20=80の法則」「パレートの法則」と呼ばれる法則は所属する老人クラブでも当てはまることに気づいた。ほかのいろいろな場面でも見られる。

おんちのモノサシ

- ➡ 「20=80の法則」の第二弾。手話普及に当てはめると……。

「あきこまの集い」の一コマ

- ➡ 平成28年から2年間開催した集いの写真12枚を掲載

★ 平成30年度版 (2018. 31年3月15日)

巻頭言 脳コワさん

- ➡ ジャーナリストが42歳で脳梗塞に。倒れる前に取材で知った少年少女たちの行動と、自身が脳梗塞になって体験したことが重なることに気づいた。

秋田弁と手話

- ➡ 「秋田弁にみる話し言葉の便利さ」「秋田弁と手話の共通点」「豊かな表現は優しさから生まれ、優しさはゆっくりとした表現から生まれる」ことに触れた。

平成の聴覚障がい児の子育てと親の会

- ➡ 昭和23年5月、「秋田県聴覚障がい児を持つ親の会」を立ち上げて全国の仲間を知る。他県の取り組みやたくさんの保護者と出会い、当事者も先輩と出会えたことは良いロールモデルとして役立った。

LDという名称について

- ➡ 診断名や診断の分類が変わってきている。名称の変化に対応していくためにも常に最新の情報に目を向ける重要性を述べる。

普及…… 速記と手話

- ➡ 速記の普及を願ってきた立場から、速記と手話の似ているところ違っているところを書いてみた。

★ 平成31年度版 (2019. 令和2年4月25日)

巻頭言 戦争と平和と科学技術の発展

- ➡ 技術史を学ぶと、科学技術が発展する陰には戦争があることに気づく。戦争と平和のどちらを目指すか悩ましい選択に迫られる。

家族支援について考える

- ➡ ① 20年前の思い出として
自閉症児者の家族支援を研究。当事者と家族の生活を豊かにする方途について考察し、家族、親の会の仲間の存在が大きな力になっていることを指摘した。
- ② 残念に思うこと
通級が制度化される以前と以後を比べると、子どもとふれあう時間に余裕がなくなっている。また、保護者が親の会の意義について気づいていない現状を述べている。

山田芳男さん逝く

- ➡ ① 秋田の言語障害児教育の大先輩。令和元年8月30日、86歳で逝去された。平成23年9月の潭潭に「回想 第39回秋田県聴覚・言語障害教育研究大会に参加して」を再掲した。
- ② OB会の発足が平成7年で翌年の6月に会報「潭潭」が創刊された。12年まで年1回の発行であった。14年には聴言研の事務局が県北に回り、会報の企画・発行は山田さんを中心に担い、14年年度～16年年度の3か年の間に14回発行された。テーマを設け、OB会員から原稿を募り、充実した内容の会報に仕上げた。

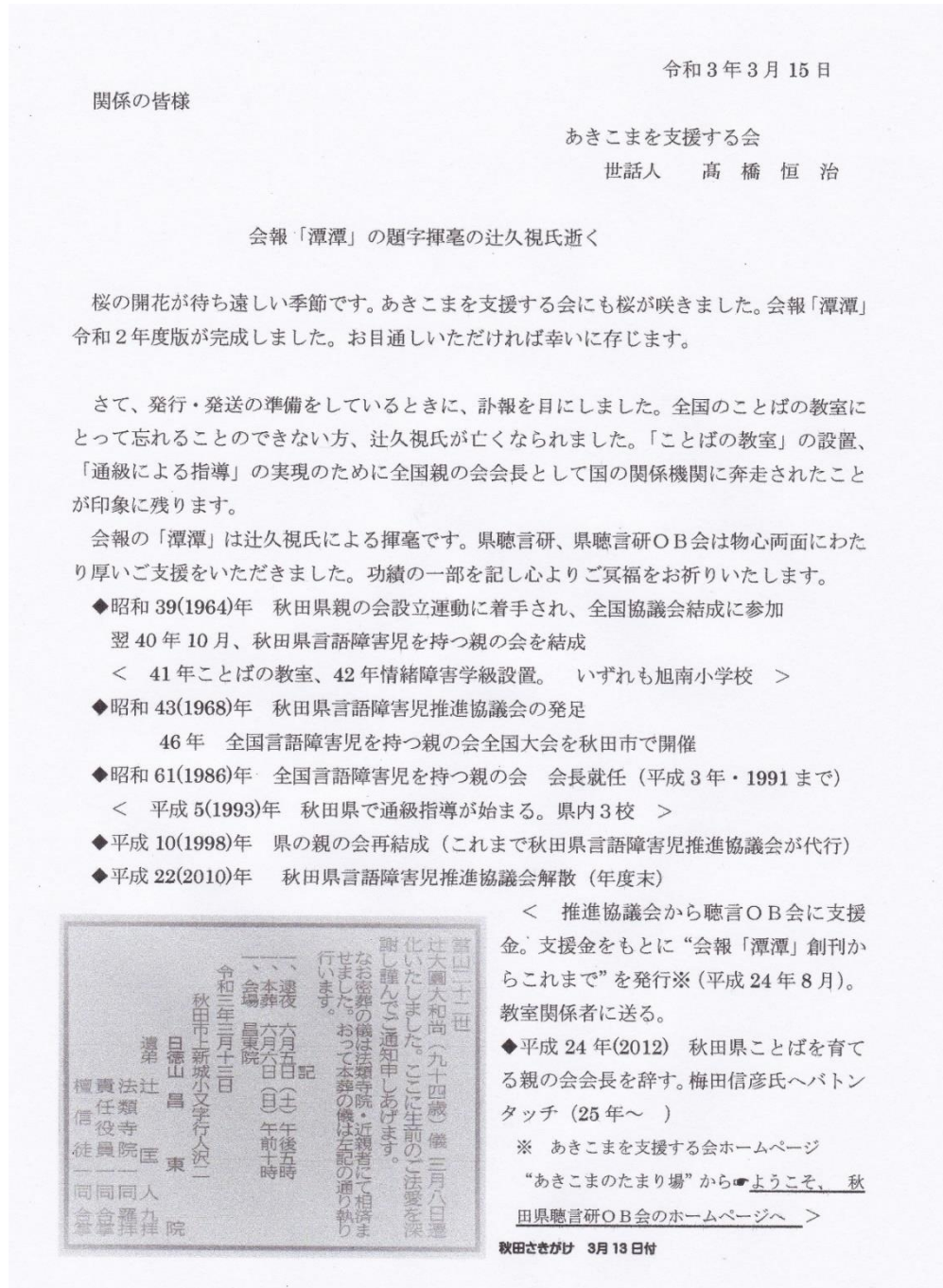
【 ホームページで読むことができる 】

【 検索 】 [あきこまのたまり場](#)

<ようこそ、あきこまを支援する会 (旧秋田県聴言研 OB会) のホームページへ>

発達障害と言わないで (その1、その2、その3)

- ➡ その1 発達に障害をくっつけている不思議。料理ができないのを料理障害と呼ぶのだろうか。
- ➡ その2 誕生してから死を迎える間際まで個人の発達は続きます。周囲の理解、発展に貢献できるのも発達と考える。仮に障害があっても生きている意味は大きい。また、澤石・秋田県医療センター副センター長の「アスペルガー症候群と考えられた少女が発達障害の女の子ではなく、个性的で魅力的な女性に変わった例」を述べた新聞記事を紹介
- ➡ その3 精神科医・香山リカ著「発達障害と言いたがる人たち」から。一時期発達障害がブームになったその要因は？



巻頭言 共に「ゆとり」を

- ➡ 学校は多忙で休みが取りづらい「ブラック職場」といわれる。脱ゆとり教育に切り替えられた今の教育に思うことは。

読まれていますか？ “ 秋田のきこえとことば ”

➡

最近《8月》の新聞記事から “ その校則、何のために ”

- ➡ 夏休みを終える子どもたちへ公認心理士や臨床心理士がアドバイス

特殊から特別支援へ ……早くも 20 年経過

- ➡ 特殊教育からも学べるものは多い。「秋田のきこえとことば」を読み返してみませんか。

通級指導教室担当 5 年目を終えようとする今 そしてこれから

- ➡ 指導担当を整理し、これからの在り方について考えるよい機会になった。

「ことばの教室通級生」の投稿に学ぶ

- ➡ 障害者が過ごしやすい社会であって欲しいと訴える。

手話秋田普及センター冊子から 「三つの健康」「十人一色」

- ➡ 「三つの健康」…からだ、こころ、そしてことば

「十人一色」…十人十色が求められている今、昔から金太郎飴に例えられる十人一色についての問題提起

◆関連情報コーナー ◆あとがき

★ 令和3年度版 (2021. 令和 4 年 3 月 25 日)

巻頭言 「ト」と「マ」と「レ」 のすすめ

- ➡ 「ト」はトリセツ、「マ」はマンダラ思考、「レ」はレシピ (処方箋) の三つの流れを追究することで多くの課題は解決する。

9 つのマスから無限のアイディア

- ➡ タテ列 3、ヨコ列 3 からなる 9 つのマスを活用したマンダラートと呼ばれる思考法。さらに一つ一つのマスから 9 つのマス、合わせての 81 マスから課題解決の方向を読み取る。

不安を抱える M さん M さんを支えているものは

- ➡ M さんは幼、小、中、高と認められない生活を過ごし不安を抱えていた。就活で「もにす」認定を受けた企業にたどり着き、現在も社会適応を目指し頑張っている。

骨折闘病記

- ➡ 小学校で「ことばの教室」に通ったことのある T さん。自転車で通勤する途中に事故に遭い骨折し、リハビリに励んできた体験記。

出合った 新・着・図・書にガッテン

- ➡ 著書「ろうと手話」。副題に「やさしい日本語が未来をひらく」とあり、ろう者だけでなくやさしい日本語が求められていることを指摘する。

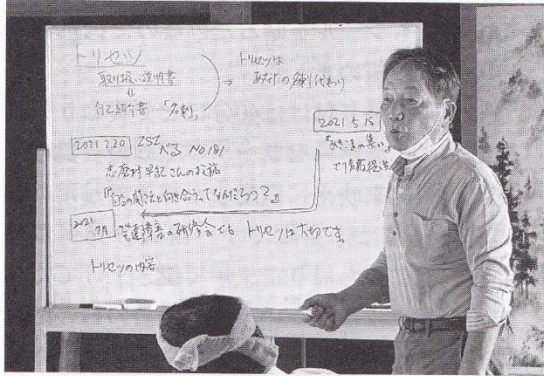
スマホに換えました。

- ➡ ガラ系が故障し、やむなくスマホに切り換えて感じたこと、体験を述べた。

住み慣れた地域で 子と親を支える居場所づくり

- ➡ 2018 年、医療的ケアが必要な重症児者デイサービス事業所「にのに」が創設されました。秋田市初の施設。開設の思いが新聞に掲載されました。

秋田県聴覚障害児・者日常生活支援事業



秋田県聴覚障がい児を持つ親の会
賛助会員 高橋 恒治

リーフレットとトリセツに関する情報をもとにした話でした。

志摩村さん作成のトリセツ（A4サイズの紙を横に三つ折り。6ページ）のタイトルは“志摩村早紀の聞こえについて”。その1ページには「ふるさとのこと」「進学・就職のこと」が書かれています。残りのページには、「志摩村の日常生活でのコミュニケーション」「お願いしたい配慮」「基本的なこと」など個人の特性や、障害について一般的なことを分かりやすく載せてあります。周りの人に障害について理解してもらう「トリセツ」が必要かつ大切であることは、同じ年に秋田市で開催された発達障害の研修会でも取り上げられました。

「トリセツ」を作成することで、自身の聴覚障害について改めて気づくことができますし、それを分かりやすく、周りの人たちにも理解してもらえるように記録しておくことはとても大事です。名刺代わりに持ち、ときどき加除訂正しながらおおいに活用し

令和4年10月、秋田市（秋田県ゆとり生活創造センター〔遊学舎〕）に県内から11名が集まりました。「トリセツ」に関する資料解説と、講師指導の小物作品（ポーセラーツ）づくりの2つを企画しました。講師を含め、聴者は6名でした。会員による手話通訳もあり、和やかに進められました。

1 「トリセツづくりに挑戦しよう」

〈解説者 賛助会員 高橋 恒治〉

令和3年2月発行の『べるNo.181』で掲載された志摩村早紀さんの「自分の聞こえに向き合うってなんだろう？」の中で、リーフレット型「トリセツ」作成が紹介されました。志摩村さんに連絡をし、いただいた実際の



たいと思われた内容でした。わたしたち誰もが自身のトリセツを作っておけば、初対面の人との会話が弾むのではないかと思われました。

2 ポーセラーツづくり

〈講師 大館市在住 戸館 誠子先生〉

ポーセラーツ (Porcelarts) とはporcelain (磁器) とart (芸術) を組み合わせた造語で、株式会社 日本ヴォーグ社の登録商標とことです。

希望したお皿やコーヒーカップなどの白い磁器が用意され、その磁器に水に濡らしたシール (転写紙といい、イラストや模様が描かれている) をピンセットでつまんで白い磁

器に貼り付けていきました。初めは慣れない手付きでしたがしだいに手順やコツが分かって、作業が楽しくなってきました。絵に自信のない人もシールを貼るだけなので抵抗なく、容易に取り組みました。

シールの貼り付けは40分ほどで終わりました。初めてのポーセラーツづくりの会員も予想以上の出来映えに満足した様子でした。この日の作品は未完成です。講師の先生が作品を自宅に持ち帰り電気炉で焼き上げてくれます。完成は後日ということでこの日の活動は終わりました。

2週間後、作品が出来上がり再び集まりました。

参加者の感想

- 恒治先生のお話は、自分で自分を見つめ直す事ができて、とても、よかったです。
- 先輩ママさんに久しぶりにあえて、話しができて、よかったです。
- 世界で一つの食器を楽しみながら、作れて、本当にうれしい!
- 出来上がりがすばらしいので、びっくりしました。
- 今回のトリセツも、ポーセラーツも、共通してるのは、自分は自分で他でもないということ。自分に自信を持って、頑

張っていかなくちゃって改めて思えた一日でした。

- 素敵な作品を作れて嬉しかった。宝物にします。

